

自己評価報告書

平成 23 年 4 月 20 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2008 ～ 2011

課題番号：20243028

研究課題名（和文）

アダプティブ・ガバナンスと市民調査に関する環境社会学的研究

研究課題名（英文）

Environmental sociological study on adaptive governance and action research

研究代表者

宮内 泰介 (MIYAUCHI TAISUKE)

北海道大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：50222328

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：コモンズ、順応的管理、レジティマシー、自然再生、社会的モニタリング

1. 研究計画の概要

本研究は、社会のしくみや制度を順応的に変えていながら自然環境管理を行っていくということ（アダプティブ・ガバナンス）と、その中における市民調査（市民・住民自身による調査）の役割を、事例を積み重ねることによって分析し、そこからモデル構築および政策提言をしていくことを目的とする。すなわち、以下の2つの研究を有機的に組み合わせながら遂行する。(1) 自然環境にかかわる人間の側のしくみの変化に注目する。人間の側のしくみを柔軟に変化させながら、持続的に自然環境と関わってきているような事例をさまざまに集め、議論する。並行して、自然環境にかぎらず、歴史的環境・まちづくり・都市計画などについて、同様にしくみを柔軟に変化させながら維持・管理・統治している事例を集め、議論する。さらに、(2) 自然環境に限らず、市民調査の事例をいろいろ集め、市民調査の可能性や課題について議論する。あるいは、市民調査のマニュアル化が図れないか検討する。同時に、自然やまちをめぐる人文・社会科学的な調査がもつ実践的な意味について、市民調査に限らずさまざまな事例を集めながら考える。

2. 研究の進捗状況

3年間で、各自の事例研究はかなり進み、また、それらを報告しあって議論を深化させ、新しい概念やフレームワークを発展させることに成功している。当初想定していた「アダプティブ・ガバナンス」の重要性が事例調査から裏づけられただけでなく、そのアダプティブ・ガバナンスにとって重要な以下の3

点のはっきりしてきた。(1) 試行錯誤とダイナミズムを保障すること。モデルを考えること自体は悪くないし、他事例に学んでしくみを作ること自体も悪くない。しかし、それを硬直的に考えると、おかしくなってしまう。単一のしくみに任せないで、複層的なしくみに身を任せること。そうした試行錯誤を認めること。あいまいな領域を確保しておくこと。そうすることが、硬直化を回避し、しくみを動かしつつけることになる。(2) 多元的な価値を大事にし、複数のゴールを考えること。ある価値（たとえば「生物多様性」）から始めた活動も、柔軟なしくみのもとで、多元的な価値を大切にし、人びとの思いとか志といった質的なものや文脈を重視すること。思い切って問題をずらし、多元的な営みにしていき、そのことによって、複数の価値が並存して進む。(3) 多様な市民による調査活動や学びを軸としつつ、大きな物語を飼い慣らして、地域の中での再文脈化を図ること。グローバルな価値を鵜呑みにするのも、頭から否定するのではなく、自分たちの地域の文脈の中に埋め戻すこと。地域が主体になってその使いこなしをするためには、地域の中での学びや組織化が重要なポイントになる。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

とくにアダプティブ・ガバナンスについては、研究グループ各メンバーの熱心な調査により、事例から分析がかなり進んだ。一方、市民調査の事例収集は、一定程度進み、また実践的にも進んでいるものの、まだ包括的な調査研究が終わったとまでは言えない。

4. 今後の研究の推進方策

おおむね順調に進展している。現在これまでの研究成果をもとに出版準備中であり、最終年度に当たる平成 23 年度は、研究成果をまとめる段階に入っている。出版については、単に論文を集めるということはず、お互いに討議しながら内容を精査し、統一性のある書籍にする予定である。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 33 件)

- ① 竹内健悟・寺林暁良、多様な価値・目的が生み出す環境管理の正当性——岩木川下流部ヨシ原における火入れ実施の課題と3事例の比較、環境社会学研究, 16, 169-179, 2010, 査読有
- ② 富田涼都、自然環境に対する協働における「一時的な同意」の可能性—アザメの瀬自然再生事業を例に、環境社会学研究, 16, 79-92, 2010, 査読有
- ③ 関礼子、自然環境保全からみた漁村の多面的機能、地域漁業研究, 49-3, 91-106, 2009, 査読有
- ④ 菊地直樹、コウノトリの野生復帰における「野生」、環境社会学研究, 14, 86-100, 2008, 査読有
- ⑤ 佐藤哲、環境アイコンとしての野生生物と地域社会、環境社会学研究, 14, 70-85, 2008, 査読有
- ⑥ 鈴木克哉、野生動物との軋轢はどのように解消できるか?—地域住民の被害認識と獣害の問題化プロセス、環境社会学研究, 14, 55-68, 2008, 査読有

[学会発表] (計 55 件)

- ① Miyauchi, T., Legitimacy and environmental governance :A case study of the reed bed of Kitakami River., The Third International Conference on Forest Related Traditional Knowledge and Culture in Asia, 2010 年 12 月 15 日, 金沢市
- ② Suzuki, K. and Muroyama, Y., Case Study Report: Crop Damage by Japanese Monkeys, International Primatological Society XXIII Congress Kyoto 2010, 2010 年 9 月 15 日, 京都大学
- ③ Miyauchi, T., Interaction between forest resource use and social systems:Based on a case study of the Solomon Islands., XXIII IUFRO World Congress., 2010 年 8 月 24 日, ソウル・COEX

- ④ Sato, T.Takahashi, K.Takahashi, D.Mikami, K., Regeneration of Satoyama ecosystem services as an educational resource., 2nd International Conference of Urban Biodiversity and Design., 2010 年 5 月 18-22 日, 名古屋
- ⑤ Miyauchi, T., Legitimacy and environmental governance: A case study of the reef bed of Kitakami River, Japan, 15th International Symposium on Society and Resource Management, 2009 年 7 月 6 日, ウィーン (オーストリア)
- ⑥ AKAMINE, Jun., “The politics of sea cucumber foodways heritage, International conference on intangible heritage Pico Island, Azores, Portugal, 2009 年 5 月 29 日, Barcelos, Portugal
- ⑦ Maruyama, Yasushi. Social Acceptance and Social Innovation in Wind Power Technology, 7th World Wind Energy Conference 2008, 2008.6.24, St. Lawrence College, Kingston, Canada

[図書] (計 28 件)

- ① 宮内泰介, 『半栽培の環境社会学—これからの人と自然』昭和堂,, 2009, 257
- ② 鬼頭秀一・福永真弓編『環境倫理学』, 東京大学出版会, 2009, 287
- ③ 関礼子・中澤秀雄・丸山康司・田中求編『環境の社会学』, 有斐閣, 2009, 284